
○議長（稲葉昭宏君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午前 9時35分）

○議長（稲葉昭宏君） 一般質問の前に申し上げておきます。質疑答弁は的確にわかり易く要領よく行ってください。通告以外の質疑はできません。また、関連質疑は議長の許可を受けて質疑を続けてください。

質疑は一括質疑と一問一答方式どちらかを述べてから質疑に入ってください。それから、固有名詞等は発言に十分注意をしてください。

なお、本定例会において町長に反問権を付与いたします。

最後に、傍聴者の皆さんに申し上げます。議場内ではお静かにお願いいたします。

◎一般質問

○議長（稲葉昭宏君） 日程第5、一般質問を行います。

質問の通告がありますので、順次発言を許します。

◇ 藤 井 要 君

○議長（稲葉昭宏君） 通告順位1番、藤井要君。

（5番 藤井 要君 登壇）

○5番（藤井 要君） 4月26日の町議会選挙から早いもので1カ月以上が経過し、3名の初当選議員ともどもわが松崎町議会は8名となりました。議場を見渡しますと、行政を司る町長をはじめとした役場の職員に圧倒されてしまうような雰囲気ではありますが、2期目の議員を志した自分を信じ、議員としての質を高め、松崎町のために一生懸命尽くしていく所存でありますので、よろしくお願いいたします。

それでは、通告に従いまして壇上より一般質問を行います。

最初の質問は、災害対策について。那賀川河口堰水門の建設に対する現況と今後の町の考え、方針について伺います。那賀川河口堰の水門については、東日本大震災を教訓に那賀川水系河口周辺対策委員会が設置され、平成24年8月28日には水門建設の検討や一次避難所の拡充などを求めた答申書が提出されました。その前後には、常葉大学の阿部准教授を講師に招き、防災講演会も実施しております。

町長はこれらのことを踏まえてだと思いますが、水門建設に前向きになり、3年ほど前には区長さんたちとともに県に水門建設の陳情に行ったと記憶しております。

松崎町では、平成26年9月に松崎町地震津波対策アクションプログラム2014を策定し、被害の軽減を図る対策を進めていますが、町長の推進している水門建設がどの辺まで進んでいるのか、一向に見えていません。

町長は27年3月議会で地震津波対策は喫緊の課題であり、最優先で取り組むと言っておられましたが、現況と今後の方針をお答え願います。

次に、地方創生の取り組みについてであります。那賀川沿いのお花畑の花が年々衰退しているの見受けられるがどのような対策をしてきたのか、今後も花畑を現状のまま維持していくのかであります。

近年花畑の花の咲き具合がますます悪くなっていると感じているのは、私だけではないと思います。新聞によりますと、3月中旬から5月5日までの来場者は5万9080人で、前年比5092人、7.2パーセントの減と書いてありました。観光客の方をはじめ地元の人の方を聞きますと、連作や開花の遅れ、気候の変化ばかりではないような気もいたします。

松崎の花の季節の顔である桜とお花畑、町長、この花畑を以前のような誇れる花畑にする対策を怠ってきたのではないのですか。連作を避けるためレンゲを咲かす。町長は口ではいろいろと言っておられますが、何か具体的な対策を打ってきたとは思えません。今後花畑をどのようにしていくつもりなのか、町長のお考えをお聞かせください。

次に、副町長が赴任して1年を経過し、松崎のお宝を活かすために色々と考えておられると思いますが、今までの実施状況とこれからの課題、その対策をどのように聞いているのかであります。

ご存じのとおり、副町長は地元出身の方ではありませんので、私たちが気づかなかった松崎の魅力や新発見また町外者の目から見たお話を聞くことにより、やろうじゃ会、花の会をはじめとした委員会やボランティアの人たちの動きが活発になってきたと感じているところではありますが、副町長がいつまでも松崎にいるわけではありません。この良い流れを今後の町の創生にいかすために町は何をするべきか、何が必要か、また、町民に何を求めていくべきなのか、町長はお聞きしていると思いますので、お答え願います。

次に、町長は、まちづくりは、雇用を増やすことが一番であり、基幹産業である観光業を中心に農林業を据えて町を活性化させたいと言っておられますが、どのような取り組みを行うのかであります。

町長もご存じのとおり、松崎町の人口は平成17年3月末、8608人余りで、25年3月末では7219人であります。この10年間で1389人ほど減少いたしました。宿泊客数は、平成19年には19万689人余りから平成26年度には8万9076人余りに激減し、観光レクリエーション客数は34万人余りから24万人余りに減少しております。合計した観光流動人口は26年度32万9000人余りであります。20万1000人ほどの減少になります。

一方、耕作放棄地は88ヘクタールから100ヘクタール余りに増え、農業従事者は減少しています。

町長は、総合計画で人口7000人のまちづくりを掲げておりますので、観光業と農林業をどのように融合させ、人口減少の流れを断ち切り、未来に輝き続けるまちづくりを行うのか、お伺いいたします。

これにて壇上からの一般質問を終わります

(町長 齋藤文彦君 登壇)

○町長（齋藤文彦君） 藤井要議員の一般質問にお答えします。

1. 災害対策について。①「那賀川河口堰水門の建設に対する現況と今後の町の考え、方針について」でございます。

那賀川河口の津波対策については、平成23年度から「那賀川水系河口周辺治水対策委員会」を開催し、東日本大震災を踏まえた今後の津波対策のあり方について議論を重ね、津波から生命財産を守り、減災効果の期待できる水門が有効であるとの答申を得ています。

また、平成25年8月には、水門を含めた松崎海岸、三浦地区漁港海岸の津波対策支援の要望活動も行いました。現在のところ、予想される南海トラフ巨大地震に対し、市町毎に県と共同で「静岡モデル推進検討会」を立ち上げ、本年度は三浦地区及び松崎地区に分かれての地区協議会を順次開催し、護岸、水門等の整備案を基に津波防災対策の検討を地域住民と協働で進めていく予定です。この地区協議会での議論を経て、「静岡モデル推進検討会」で町の総合的な地震津波防災対策を検討していく考えであります。

2. 地方創生の取組みについて。①「那賀川沿いのお花畑の花が年々衰退していると感じるがどのような対策をしてきたのか、今後も花畑を現状のまま維持していくのか」についてでございます。

那賀地区の「田んぼをつかった花畑」につきましては、議員もご承知のとおり、平成12年度から花の咲く町推進事業の一環として推進しているものです。

今春は、32人の耕作者の皆様のご協力をいただき、約5万5000㎡の花畑に、49日間で5万

9080人（1日当たり1205人）のお客様が訪れ、那賀川堤の桜とともに、町を代表する花のスポットとなっております。

花畑では、松崎町観光協会により、ガラポン抽選会や「まっちー」との写真撮影会が実施されるとともに、今年は、松崎町まちづくりやろうじゃ協議会により「リアルかかし」も設置され好評を博したところであります。

しかし、議員もご指摘のとおり、今春は「アフリカキンセンカ」や「るりからくさ」、「姫金魚草」の背丈の低い花が、草に負け、十分に見ていただくことができませんでした。

種苗業者には、毎年、生育状況を確認しておりますが、今回の要因としては、台風18号により大量のナズナの種子が飛来した可能性があり、発芽時期に負けてしまったこと。稲刈り、脱穀時期の遅れが、耕うん、種まきの遅れにつながり、種が十分に生長できなかったことなどが考えられます。

この花畑も「下田市の水仙」「河津町の河津桜」「南伊豆町の桜や菜の花」とともに早春を告げる花の名所として、欠くことのできないものとして、旅行雑誌に取り上げられるとともに、旅行業者にも認知されていることから、耕作者の皆様にもご協力いただき、収穫後速やかに耕うんし、種まきができるような方法を取り、継続してまいりたいと考えております。

②「副町長が赴任して一年を経過し、松崎の宝を活かすために色々と考えておられると思うが、今までの実施状況とこれからの課題、その対策をどのように聞いているか」についてです。

副町長が赴任して1年が経過しました。その間、常に話し合い、意見交換をしながら町政運営を行ってきましたが、大きな助けとなっております。

いろいろと話す中では、桜葉や棚田、なまこ壁や川のりなどは、日本を代表する宝であると言っても過言ではなく、こうした資源は、町民はもとより県内外から訪れる観光客にとっても、様々な恩恵をもたらすとともに、経済効果を高める役割も担っていて、町には欠くことのできないものだという考えも聞いています。

昨年は、桜葉の消費拡大に向けた他市との交流や道の駅の機能強化に向けた取り組み、また石部棚田の持続的な保存体制構築に向けた、大学との連携強化の働きかけなどに積極的に関わってもらいました。

また、ふるさと納税につきましても「チームふるさと」のアドバイザーとして職員をけん引してくれています。

今後につきましては、こうした資源の保存や活用には官民連携の体制構築が課題であり、その解決に向けて、地域の魅力づくり・ブランド化による多様な主体の参加・交流の場づくりを進め、経営的発想のもと「選ばれる町」として、交流人口の拡大、基盤産業の育成を図りたいという思いもまた話し合う中で聞いています。これは私の考えとも一致していますので、この思いを現実のものとするよう今取り組んでいるところです。

③「まちづくりは、雇用を増やすことが一番であり、基幹産業である観光業の中心に農林業を据えて町を活性化させたいと言っておられるが、どのような取り組みを行うのか」についてでございます。

これまで私は、松崎町の観光は、第一次産業である農林漁業を土台とし、それらを観光と関連づけて町を活性化するという「全町まるごとふる里自然体験学校」を掲げ、体験を通して対価を得る、教師は地域住民であるとして、体験型ツーリズムを推進してきました。

これまで農業関係では、ぶどう狩り、甘夏みかん狩り、ワサビ漬けづくり、石部棚田オーナー制度、漁業関係では、地引網体験、鮎のつかみどりや岩地海の体験修学旅行、林業関係では、間伐体験などを実施し、都市住民との交流を進めてきたところでございます。

当然のことながら、これらの体験を実施していくためには、体験を提供する前提となる、農林水産業の振興が必要となることから、これまで環境整備や就業支援、6次産業化に向けた支援を行ってきたところでございます。

今後も町全体で体験型ツーリズムに取り組むことで関係者の所得増や新たな雇用を生み出すとともに、受入体制を整え、交流から移住、定住につなげてまいりたいと考えております。

以上です。

○5番（藤井 要君） 一問一答方式でお願いします。

○議長（稲葉昭宏君） 許可します。

○5番（藤井 要君） 水門の関係、私が言ったところ、町長の答弁で要望活動も行っているよということで、今年度県とまた町の方といろいろお話し合いをするというようなことでありますけれども、答申を受けてから、町長、3年ほど経ったわけですね。その間・・・、先ほども言いましたけれども、バスで県庁の方にも行って、いろいろ陳情をしたというようなことの中から、3年間何もなかったと。

ここにアクションプログラムを持って来てありますけれども、この中では、いろいろ書いてありますけれども、そういう水門の関係は何も見えてこなかったということで、どのくら

いの、どういうことを言っていたんですか。県には、どのようなことを。

○町長（齋藤文彦君） その松崎町の海岸については、那賀川河口の津波対策、水門と防潮堤のかさ上げが静岡県地震津波対策アクションプログラム2013に明記されていますので、それで、平成25年4月に那賀川水系の河口周辺治水対策委員会からの水門は津波対策に有効であるとの答申をいただいているわけですから、それを合わせて県の方をお願いにあがったわけです。

これは、非常に難しい問題がございまして、水門と松崎の防潮堤とは一対のもので、水門と防潮堤の高さを違えるわけにはいきません。

それで、静岡県の第4次地震被害想定津波の高さというのが、県から発表されていまして、雲見が6.4メートル、石部が8.2メートル、岩地が8.8メートル、松崎は7.5メートルと設定されているわけですが、県の方から1年前からその津波の高さが高くなりますよというのは聞いていまして、なかなか県の方からこれを発表してくれませんでしたので、自分たちも動けなかったわけでございます。

それで、昨日県の方からちょとしまして、南海トラフ、駿河トラフ沿いで発生するレベル1地震について最新の科学的知見を取り入れた津波浸水想定を第4次地震被害想定追加資料として津波対策の検討に活用するために防潮堤等の潮堤防高の見直しを行うということが昨日県からこういう話がございました。

これは、静岡県の防災・原子力学術会議・津波対策分科会の終了後にその高さが発表されるということになっていきますので、その高さが発表されてからでないとなかなか水門と防潮堤の一対ということがありますので、なかなか進まなかった関係がございまして。

これが発表されてから、先ほど申しましたとおり各地域に行き説明をしながら、これから地域の皆さんと話し合いを進めていくことになると思います。

○5番（藤井 要君） 昨日発表があったということで、私も県の方にも問い合わせいろいろ聞いているわけですが、先ほど言ったのは、3年ほど前から現在・・・、昨日まで・・・、一昨日まで、いろいろと町もやることができたわけですね。アクションプログラムの中では細かいソフトとハードといえ、ソフトの方になるわけですが、いろいろやっぱりこういう・・・、例えば一体型になりますよね。水門と防潮堤と一体にしなければならない。同じ高さにしなければならないということになるわけですが、その中で、町がこういう防潮堤を造ってください。こういう水門を造ってくださいみたいなそういうアイデアとか、企画というのがあちこち東北の方ではやっていますよね。そういうことを町

長は言ってこなかったんですよね。きましたか。

いろいろな松崎の要望等を・・・、ただやってくれと、水門を造ってくれということだけではなく、こういうふうなものを造ってもらいたいとか、町の意向をこうだよとか、そのようなことは、県の方とはお話ができてなかったんですか。

○町長（齋藤文彦君） 水門の建設については、いろいろと話し合っているわけですが、松崎町のアイデアとしてはいろいろ県の方に話していません。ただ、自分たちが陳情に行って一番言われるわけですが、松崎町の意見を統一してこいということをよく言われるわけですが、松崎町にはやっぱりどうしても水門に対して強固に反対する方がございまして、なかなか松崎の意見統一として、なかなか県の方でも、こっちが真剣に頼んでも、松崎町は本当にやる気があるのかというようなことはよく言われますので、そのところがぼくらのところは一番重要だと思って、県の方と話をしているところでございます。

○5番（藤井 要君） その件はわかりました。国から新たな防潮堤の高さをもってくるということですので、今後は護岸や水門等の整備案をもとに協議していくと、地区と協議していくということで回答があったわけですが、もっと先ほど、これですと7.5メートル見直しということでありますけれども、これは産業建設課長の方に答弁してもらった方がいいと思うんですけれども、その高さ等はまだ全然課長の方には入ってきていないですか。答えられたらお願いします。

○産業建設課長（斉藤昌幸君） 静岡モデル検討会、地区協議会を通じてという回答のとおりでございます。その段階では各三浦地区の漁港海岸、さらには松崎地区の海岸等の整備案が具体的なたたき台として示されなければいけないわけですが、結果的には、先ほど町長が言った高さについての情報がなければ正式な回答ができないわけですが、われわれの方では既にそれはいただいていますけれども、現段階では、まだ一般に公表はしないでくれという形での高さはいただいたうえでの整備案、たたき台は作っているわけですが、結果的には、我われの方としては、情報は得ているという回答でございます。

○5番（藤井 要君） わかりました。具体的に資料の提示はできないということですから、それはしょうがないことですが、今までというか・・・、人口減少の問題もありますよね。景観の問題もあります。これはアクションプログラムあたりを見ますと、平成34年、だいたいその頃までにはいろいろとできちゃうのかなと思いますけれども、造る自体が平成34年までにできるか、できないか、これはわからないわけですが、町長は、前回のときに、自分は水門を造りたいということでやっていたわけですが、今回もその意思は変

わらないのか、変わったのか、お願いします。

○町長（齋藤文彦君） 私は、水門を造るという意味は変わっていません。私が東北へ行ったときに、何回も言いますが、ある町に行ったら、町がほとんど壊滅状態になっていたと、そうすると、高い所に墓地があったと、墓地は倒れていなかったわけですが、先祖さんがこの様を見たらどのように感じるだろうと痛切に感じましたので、松崎町は、そんな町にしたいと思っていますので、私は水門は必要だと思っています。

ただ、今度は津波の高さというのがかなり高くなるというような感じですので、環境保全とか、周辺景観との調和とか経済性とか、維持管理の容易性とか、施工性とか、公衆の利用等を総合して考えていかなければならないので、各地区で説明会に行くと、それなりの意見が出てきて、このくらいの高さの防潮堤ができるとやっぱり生活も全部変わってきますので、非常に難しい選択を迫られると思っています。

○5番（藤井 要君） それでは、町長は、町民の皆さんの意見をよく聞いて、例えば10メートルのところでしたら、例えば7メートルに下げたりとか、そういういろいろのことを考慮しながら、推進していきたいということで理解していいですね。

○町長（齋藤文彦君） 水門建設には、私は一貫して変わっていませんので、ご認識いただきたいと思います。

○5番（藤井 要君） それでは、2つ目の那賀川沿いのお花畑の方に入らせていただきますけれども、先ほど町長の方で、今年の咲き具合の関係、いろいろありましたよね。今後も続けていきたいということですが、これは前々から言われていることで、一回やめたらどうかとか、いろいろありましたよね。先ほどだと、エージェントの関係もありますし、これは定着しています。私も定着しているとは認めますよ。でも、なんかただ気候の変化とか、そういうことばかり、言い訳と言ったらおかしいかもしれませんが、受けるのではなく、場所を変えとか、そういう発想はありませんか。

○町長（齋藤文彦君） 私は何回も言っていますが、中川の花畑と岩科の幼稚園の前のレンゲ畑を対比させたいと言っているわけですが、岩科の方は連休前にレンゲを刈り取ってしまうと非常にさびしい状態であるわけですが、私はいつも2つで対比でやっていきたいなと思っています。

その花畑については、自分たちが考えている以上によそからの反応というのが、ものすごく素晴らしくて、これは絶対継続すべきだなと思っています。

それで、必ずなぜ花の咲き具合にいろいろ変化が出るかというのは、やっぱり最初から言

われていたわけですがけれども、今年は32人の耕作者の皆さんがいるわけですがけれども、耕作者の皆さんとも連携がうまく取れないといい花が咲かないわけで、どうしても種をまく時期が遅いということを言われていますので、そのところを十分注意しながらやれば、やっぱり素晴らしい花畑になって、松崎の誇りとなるのではないかと思いますので、その花畑だけは絶対継続していきたいなと思っているところでございます。

○5番（藤井 要君） ですから、私は、あそこに600万円以上をかけているわけじゃないですか。毎年毎年。

私は、あその場所を変えるつもりはないかということと言ったんですよ。町長は、その場所を変えとかではなく、続けていきたい。それは私も続けていきたいわけですよ。具体的な名前を言うと、対岸の鮎川あたりにできないかと私は思っているわけですよ。

そして、あそこを松崎町の公園にする。そして、最近でも私は、幼稚園のお母さん方なんかに聞いたりしますと、松崎町には公園がないということですよ。

この前の3月に私は言いましたけれども、牛原山あそこに子どもたちが行くのにも、若いお母さんたちが行くのにも不便であると、確かに牛原山は松崎町内を一望できるいいところであるけれども・・・、ということなんですけれども、鮎川あたりを一年中お花畑にする。私から言わせれば、松崎町の公園にする。そして、教育の場にする。

若いお母さん方とか、子どもたちが自転車で町内からそこへ通えるわけですよ。中川の方からも。そういう発想はできないかということですが、どうですか、その点は。

○町長（齋藤文彦君） 連作障害等もあって、いろいろ場所を変えたらどうだろうかというような話がございます。私もいろいろ考えるわけですが、ちょっと鮎川に関しては、いまちょっとここでは言えないですが、壮大な計画がありまして、進めていきたいなと思っているところがございますので、鮎川に移すというのはなかなか厳しいところがあるのかなと考えるところです。

○5番（藤井 要君） いま町長から壮大な計画があると、いまここでは言えないということですが、それでは、町民がびっくりするような町の活性化になるような、そういうビックなプロジェクトがあると解釈してよろしいですか。

○町長（齋藤文彦君） 地主の皆さんがいることですから、地主の皆さんの了承を得なければいかんわけですが、それなりの松崎町としては本当にいい活性化のための策ではないかなと私は考えているところでございます。

○5番（藤井 要君） それはいつ頃、町民に発表できるくらいのところまでいくんですか

ね。

○町長（齋藤文彦君） この場で直接言うことはないわけで、言えないですけども、それなりの考えがあると、町として。記憶にとどめていただきたいと思います。

○5番（藤井 要君） 私は、公園と言いましたけれども、そこに公園を造りながら、あの上の山に木が植えてありますので、そういうのを整備しながら。そして昔ありましたよね、ごみ焼却場とか。つぶれましたけれども。ああいうのもあそこで、上に行って、もしあれだったら、火葬場も・・・、これは怒られちゃうかもしれませんが、私の構想としては、そのようなができないかなと思っていただけですけども、その大きな構想がどういう構想なのか、私が言っていることと同じかもしれないし、全然違うかもしれない。そういうことで、いまここで聞けないのはちょっと残念でありますけれども、早い時期に、町長はそういうのをまとめて町民に発表できるように期待するしかないということになりますので、もう一度、それは近いうちというか、1～2年のうちにある程度の構想はできますか。

○町長（齋藤文彦君） あの鮎川のところは、本当に中学校の先生が中心になって、ビオトープを作って、菜の花が咲いて、あの花畑から見ると、私は素晴らしいなと思って、中学校の先生や子どもたちに感謝しているわけですけども、そのところをぜひ松崎としても活性化のための手段として使いたいなと思うところでございます。

ただ、これからどういうふうに進んでくかわからないところがございますので、そう簡単には言えませんが、松崎としてはそういう考えを持っているということでございます。

○5番（藤井 要君） あまり突っ込んでも押し問答になるだけですから、あれしませんけれども、これは6月6日の静岡新聞ですか、河津だとかいろいろ出ていますけれども、私は、防災機能を備えた子育てなどの複合交流施設を設けるとか、交流文化コミュニティ機構の集積拠点とか、河津はこれになっていますよね。

ですから、そういうのが私はできるんじゃないかなと思って期待しているところですけども、どうなるかわかりませんが、これからの人口減少のストップまた雇用の場ができるように、そのような施設というか、いろいろな構想をやってもらいたいと思います。

それでは2点目になりますけれども。副町長が赴任して1年を経過したわけですけども、いろいろ棚田とか、桜葉、そして、なまこ壁、大学とのいろいろ連携があるわけですけども、もっと具体的に今までこのような効果が、副町長が赴任したおかげで、このような効果が表れたというようなことがありましたら、お願いします。

○町長（齋藤文彦君） これは本当に副町長は農業関係に強いものですから、非常に私は感謝しているところで、これは副町長の方から答えてもらいたいと思います。

○副町長（佐藤 光君） 申し訳ございません。1年ということでもございますので、先ほど議員の方からのご発言にございましたように、地域活動の活発化ということで、非常にうれしいご評価をいただいているということは感謝を申し上げます。決して、私がメインで貢献したということではなくて、これはあくまでも地元の皆様がそういったことを実践してくださっているということでありまして、私は、少なからず助言はさせていただいたかもしれませんが、すべて地域の皆さんの活動の成果かなというふうに思っています。

そういったことで申しますと、新しい形でこういったことができないかとか、こういったことができないかということは地域の皆さんと意見交換しながら、活動についてアドバイス等をしていただいているかなとは思いますが、そういったものが地域活動という形で少しでも活発化されていれば、私が申し上げるのもおこがましい話になりますけれども、成果かなと認識しています。

ご質問の桜葉の関係とか、棚田の大学との連携の絡みでございますが、やはり桜葉につきましては、私も静岡から参りましたけれども、なかなか静岡県内でも松崎が桜葉の産地だと、あるいは日本一の産地だということをご存じの方が非常に少ないかなというふうに実感をもっております。

そういった中で、いろんな関連の市町さんには、それぞれの産物がございまして、そういったものをうまく連携しながら新しい商品開発なんかができないかというようなこともございまして、昨年の議会の中でも話題に出ましたけれども、掛川市さんがいろいろな形で、これまでの歴史の中での縁がございまして、そういったところとさまざまな産物の、有効活用に向けての連携ができないかということも働きかけをしております、それぞれいろんな案を出し合っているところでございまして、もう少しお時間をいただきまして、結果に結びつくように継続していきたいと思っております。

棚田につきましては、これまでもかなり常葉大学さんの方と色々な形で連携をさせていただいております、マンパワーとしては非常に保存活動について大きな助力をいただいているところでございます。これをもう少し持続可能な形に結び付けられないかということで、前々から私も棚田は教育的な機能が非常にあるのではないかなというふうに考えておりまして、その教育のフィールドとして十分活用していただければということで、いま大学の方と何度も行き来をしまして、その連携に向けまして調整をしているところでございます。

こちらにも具体的な成果ということではございませんが、経過報告ということになるかと思
います。

先ほどの冒頭のお話に戻りますけれども、やはり地方創生の絡みで、今年地方創生戦略を
策定することになるかと思いますが、その中で、やはり官民連携と広域連携が、私は個人
的には非常に重要なことになるのかなと思っております。そういった中で、官民連携のそう
いった先ほどの同じ思いの町民の皆様との連携の強化がされていけば、そういった地方創生
の動きに弾みがつくのではないかなと考えておりますので、そういったものは引き続きご助
言をさせていただきながら、皆さんと一緒にまちづくりを進めていければと考えて
おります。

○5番（藤井 要君） ありがとうございます。対策等はまだまだちょっと具体的なものが見
えてこないですけれども、副町長がおすめのここはぜひとも松崎に必要なだとか、ここは開
発しなければならないなんていう、そのような1年経ったばかりで、なかなか思いつかない
のかもしれませんが。ありますかね、そんなところは。

○副町長（佐藤 光君） これも、私は皆様に折に触れて申し上げているところなんですけれ
ども、松崎はこれまでどちらかというと観光の目玉が海岸線といいますか、海が夏の海水浴
を含めまして、非常に大きな資源というような形でPRしてきたかなと理解しております。

私は、それに加えて、やはり伊豆半島を山から海まで一つの生態系的な繋がりとして
も非常にコンパクトにまとまっております、里山・里地という形で非常に水の循環とか、
環境のネットワークが非常に見やすい形で、凝縮された形でまとまっているということで、
そういったものを非常に有効活用できるのではないかというふうに思っております。

最近ですと、松本さんが古道を活用しまして、ツアーを企画されて好評を博しているとい
うことも聞きますし、3月にはトレイルジャーニーという形で山をトレイルするイベントも
開催されております、山も非常に有効な資源だというふうに思っておりますし、それを山
と海を連携する、あるいはその中間に当然川があるわけで、那賀川は非常にそのあいだをつ
なぐ貴重な資源だというふうに思いますので、そういったものを一体的にパッケージとして
活用していくということが非常に重要なことというふうに思いますし、以前、一回話題に上が
りましたけれども、森としますと、21世紀の森等もございますので、そういったものも答弁
させていただいておりますので、控えますけれども、活用の可能性は非常にポテンシャルが
高いのではないかなと考えております。

○5番（藤井 要君） いま副町長の方から山から海までの川は有用な利用ということで、い

ま21世紀の森等がございましたけれども、町長、町長の好きな長九郎、これもいま山が片道しか行けないような状態。宝蔵院もやっぱりいろいろ利用価値があるのではないかなと思うんですよ。やっぱり私は中川の出身者なので、ほかのところの地区のことをなかなか言えなくて、中川ばかりになるかもしれませんけれども、大いにこれは活用してもらって、観光と農業、それと結び付けてやってもらいたいなと思っております。

そこで、町長がテレビ・・・、なまこ壁に出ましたよね。今なまこ壁のあるところを地図に落とすというようなことをやっているみたいですがけれども、町長のなまこ壁のテレビに出た回答とか評判が悪いみたいですがけれども町長は見ましたか、自分のやつを。

○町長（齋藤文彦君） 見ました。だけど、あれは結構長い長いのを一部切り取って、非常に残念だなと思うわけですがけれども、松崎町はやっぱり200いくつのなまこ壁等があって、今だんだん減少してきているということがございまして、これをどういうふうに保存するかというのは、もし、反問権じゃないですがけれども、もし藤井さんだったら、どういうふうな形でなまこ壁を残すような感じになりますか。

ぼくはいろいろ考えているわけですがけれども、やっぱりある程度副町長と話をして、モデルストリートを作って、そこのなまこ壁は絶対残して、そして伊豆文邸みたいにこれは使いませんから松崎町で使ってくださいというような形になればいいわけですがけれども、個人の蔵を松崎のお金で・・・、なかなか非常に厳しいところがあります。

それで、賀茂振興局の土屋さんの方から広域でやったらどうだろうかというような話がございまして、いま下田の方とうまく進められないのかなというようなことを話をしているところでございます。

ただ、なまこ壁全部を保存するというのは非常に厳しいところがあると思うんですがけれども、やっぱり松崎の財産ですから、それなりの考えを作っていかなければならないと思っていますところでございます。

○5番（藤井 要君） 町長が反問権なんて言っていましたので、私はいつも・・・、持論ですがけれども、これは言うように民間の方のご意見も聞かなければならないことです。私は、近藤先生ですか、近藤邸、観光協会の横の。お話なんかもさせてもらってますけれども、あそこの中には、長八の漆喰なんかもありますよね。前にももう、1年も2年も前から言っていますけれども、あそこの後ろの蔵を見たときに、もうグズグズなんですよね。グズグズというか、壁がない、天井がない、床がないもので、耐震性はないと思うんですよ。前にも屋根が壊れたときに町がいくらか助成していますよね。直すときにね。

近藤先生の場合ももうお歳だということで、町に買ってくれなんていう話もあったということも聞いております。ですけれども、ある程度町が保存してくれるということになれば、それなりに協力するというようなことも伺っています。

そして、観光客の方が間違ってきて、中に入ったりするんですって。そうしたときにも協力してやっているということで、そんなに深く考えなくても、やっぱり対話によっていろいろな道が開けてくるんじゃないかと思います。

私はいつも思っているのは、そこを例えば直して・・・、いま漁業のことはなかなか言わないんですよね。農林業と漁業のことも言うんですけれども、だいたい耕作放棄地なんていうことで漁業のことはなかなか言わない。やっぱり町にも漁業をやっていて、今は漁師さんをやめちゃって、しょうがない、小釣りでという方もいるんですけれども、私はそういうところ、蔵を直して、魚の大きさは揃いませんけれども、その地場で採れたいろいろな一匹一匹になるかもしれませんけれども、そこで魚カフェをやったりとか、それは漁師のおばさんたちが・・・、そういう方法もあるんじゃないかということを私は何年も前からこれは言っているわけなんですけれども、そういうのができるんじゃないか。そこで雇用が生まれるんじゃないかと思っているわけなんですけれども、どうですか、町長。

○町長（齋藤文彦君） 私も同じ意見で、本当は「蔵ら」さんみたいになまこ壁の蔵を使って営業ができると、そういうようなことができればいいなと思っているところです。

ただ、モデルストリートを作ろうというのは、そういうことを考えて、今度ゼロックスさんなんかとシェアハウスとかなんとか、交流館みたいなのを造るわけなんですけれども、ここをなまこ壁の蔵とかなんとかを使って、都会の人たちがたくさん来られるような形にすればいいかなと考えているところでございます。

○議長（稲葉昭宏君） 申し上げます。時間を延長しますか。

○5番（藤井 要君） はい。延長してください。

○議長（稲葉昭宏君） 5分間延長します。

○5番（藤井 要君） じゃあ、私とかなり意見が同じようなところもあるわけですので、ぜひとも前向きに進めてください。私は、この問題はこれで終わりにしますけれども、近藤邸の横に石畳みのようなものがありますよね。あれは車もなんでも行き来をする・・・、だめになってきているわけですよ。あそこを・・・、近くの住民というか、もう使わなければならない人がいますけれども、なるべくあそこを整備して、もっと石畳みとかをやって、普通の一般のお客さんの車は通らない。でも、あそこに家があって、どうしてもそこを通らなければ

ならない人は仕方がないにしても、なるべく傷まない方法とかも・・・、方法じゃないかなと思っていますので、それはまた考えてもらいたい。

時間の関係もありますので、次に行きますけれども、3のまちづくりは雇用を増やすことが一番大事であると・・・、これはそうですよね。雇用が増えれば、いろいろ出てくるでしょうけれども、そういう面で、先ほど間伐材だとか、鮎のつかみどりだとか、体験型のリゾートということをいろいろ言いましたけれども、これを具体的にもう少しお話できたらお願いします。

○町長（齋藤文彦君） 定住に向けてですか。

（藤井議員「そうです」と呼ぶ）

○町長（齋藤文彦君） 今いろいろ考えているわけですがけれども、伊豆の国市なんかの例をみますと、定住・移住した人がものすごく多いという話を聞いているわけですがけれども、それを見ていると必ず・・・、藤井さんも農協にいたわけですがけれども元気なＪＡがいるわけです。その特農家がいて、うまくそれが連携して、それで本当に農業をやってここで食っていくのかというその人選、そして、伊豆市はトマトとプチトマトといちご、これをやれば絶対儲かるというシステムがわかっていますので、それで非常に定住者が増えて、1000万円以上稼ぐ人が多いと聞いているわけですがけれども。松崎町としてもやっぱり田舎暮らし応援ツアーじゃないけれど、町としてこういうことを体験できますよというシステムを作りたいと。そして農業としても桜葉とわさびとアロエをやれば、これだけやれば、これだけの生活ができる。やっぱり生活できるような、目の前に見えるやつを作っていかなければいかんかなと思っていますところ。これを今からちゃんと進めて、農業を中心にしての定住を増やしていきたいなと思っています。

○5番（藤井 要君） 今のことに對して、副町長からも一言ありませんか。

○副町長（佐藤 光君） やはり人口維持に向けては産業基盤を強化するというのが第一だというように思います。そのときに、やはり農業者の方ももちろんですが、それを支えるＪＡの皆さんであったり、あるいは行政であったり、そういった関係の皆様が連携するということがやはり大事だというふうに思いますし、その前にもやはり松崎の資源ってどんなものがあるんだろうとやはり客観的に評価をする中で、そういった資源を有効活用するということを本当に本気になって考えていく必要があるかなと思います。

国がいうところの、どういう産業を興して稼げるのかと、やはり経済活動が人口維持のためには一番大事なことだと思っておりますので、そういったものを関係の皆様と一緒に有効

活用する方策を考えていく必要があるかなと思います。

○5番（藤井 要君） 先ほど、富士ゼロックスの関係も出ましたし、今回、今年度光ファイバが通るとのことですよね。私もテレビ等いろいろ見ていると、ITの関係の社長が、農業をやったこともない人間が、1個1000円のいちごを作ったりとか、それがどんどん売れているというようなこともあるわけですね。

ですから、先ほど私も檀上から言いましたけれども、休耕地、そういうところの活用ももちろんいま考えているわけでしょうから、そういうところとゼロックス、光ファイバ、そして東京からでも北海道からでも、今は、ボタン一つによって温度調整もできるような時代です。そういうことで、町・・・、伊豆半島といっても・・・、なんでもできる伊豆半島でしょうけれども、休耕地を集積することによってハウスを作っていく。それに対してゼロックスの関係とか、そういうことをやっぱり町長、これから真剣に考えてもらわないと人口減少も止まりませんし、雇用も増えていかないと思うんですよ。

伊豆縦貫道があと10年か15年かわかりません。土肥の方はあと3～4年でできるわけですが、そういう点をひっくるめて最後の方になりますけれども、全体的な構想をもう一度お願いします。

○町長（齋藤文彦君） いま桜葉の生産が日本一だということになっているわけですが、松崎の桜葉の組合の皆さんたちが、いま60人以上頑張ってくれています。

そして、桑の松崎桑葉組合の皆さんも休耕地を利用してやっているわけですが、やっと芽が出てきたかなと思います。

桜葉の方も自分たちもこれだけするから、松崎町にこれだけ何かしてくれというようなことを桜葉の方に話をしてありますので、いろいろな町と桜葉と議会と協力してやっていくような体制が出来上がるのではないかと考えています。

先ほど、副町長が言いましたけれども、やっぱりある程度のお金が入らないと生活できないわけですから、生活ができるような農業ということでやっていけばいいかなと思っています。

○5番（藤井 要君） 最後になりますので、今日いろいろと副町長の方にもお伺いいたしましたし、ある程度まとめたお話も伺いました。

いつも町長は、「検討する」「検討する」ということじゃなくて、今回いろいろな面で答えてくれましたから、ありがとうございます。それに前向きにスピードアップということを町長もお好きですので、どんどん、どんどん役場のここにいる職員の皆様、課長様をうまく

使って、未来に輝くまちづくりをお願いして、私の一般質問を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○議長（稲葉昭宏君）　以上で藤井要君の一般質問を終わります。

暫時休憩します。

（午前１０時３０分）
